

須賀遺跡（第8次）発掘調査の成果

- 1 調査期間：平成30年3月7日～平成30年4月5日
- 2 調査場所：鈴鹿市須賀一丁目1693番3・5
- 3 調査面積：188 m²

遺跡の位置と環境

須賀遺跡は鈴鹿川の右岸に広がる標高10m程度の中・低位段丘の最東限に位置します。この段丘上には西から十宮古里遺跡・萱町遺跡・須賀遺跡といった弥生時代～古代の大規模な複合遺跡が点在しており、遺跡の密度の高い地域として知られています。

須賀遺跡は、西部の阿自賀神社の社殿が鎮座する墳丘上からや、東部の国鉄伊勢線（現「伊勢鉄道」）工事の際に弥生時代の土器が採取されたことから存在が明らかになり、弥生時代の遺跡として認知されてきました。実際に発掘調査が行われたのは宅地造成に係る平成4年度の調査からで、以来7次にわたる発掘調査が実施されています。

主たる弥生時代についてみると、今回の調査地から北へ90mの地点で実施された第2次調査で弥生時代の大溝2条が確認されました。溝SD0201は幅3m、深さ1.5mと大規模で、弥生時代中期前葉頃の環濠と考えられます。東70mの地点での第5次調査においても、弥生時代前期の溝、中期前葉の環濠、中期後葉の方形周溝墓が検出されています。中期前葉の溝SD0501は環濠の一部と考えられていて、第2次調査のSD0201と一連のものであることが指摘されています。このSD0501からは東海地方でも最大級の大型壺が出土し、本遺跡の特殊性をうかがわせています。

本調査地の西に隣接する第6次調査区では、一辺9mを越える方形周溝墓1基と一辺5m前後の小規模な方形周溝墓4基が検出され、本造成地にかかわる第7次調査に

においても一辺9mを越える方形周溝墓1基、土壙墓4基が検出されています。また、北東隅でこの環濠の一部と見られる溝が確認されており、今回の調査区は中期前葉の環濠集落の外縁部ということになります。

弥生時代以外については、遺跡西部の第1次調査区で古墳時代後期から飛鳥時代にかけての土坑・溝が高い密度で検出されています。また、阿自賀神社の境内地の調査では奈良時代の二彩小壺が出土しています。

第6・7次の調査区では古墳～飛鳥時代の大溝（流路?）・竪穴建物奈良～平安時代の掘立柱建物・柵列・土坑・井戸・大溝など多数検出されています。

基本の層序

基本層序は、残りのよい南区では第1層（表土）：水田耕作土、第2層（上層包含層）：古墳～古代の遺物を含む黄灰色砂シルト層、第3層（中層包含層）：褐灰色シルト層、第4層（下層包含層）：弥生時代前～中期前葉の土器片を含む黒褐色シルト層となっています。第5層が地山（基盤層）であり褐色・黄褐色のシルト層です。遺構の底部など一部深度の深いところではさらに下層に黄白色粘土層が現れています。第4層上面で上層遺構を、地山直上で下層遺構を検出しました。

北調査区では2～4層にあたる層は確認できず第1層の直下が第5層の橙色シルトの地山となります。

調査の成果

第1の成果としては、弥生時代環濠集落に伴う墓域の実態が明らかになってきたことです。集落の中心部を囲む環濠は分譲地

の北東部を通過しており、その外側にあたる調査地は方形周溝墓・木棺（土壙）墓が密集する墓域として利用されていたようです。

北区ではまず方形周溝墓 SX0816 が確認されました。東周溝を第 7 次で確認された方形周溝墓 SX07119 と共有します。南北 9.2m×東西 11m以上の東西に長い長方形とみられ、方位はほぼ正方位です。南辺溝床面からやや浮いて出土した弥生土器壺から築造は弥生時代中期前葉以前と見られます。

方形周溝墓 SX0816 の墳丘下から検出された細溝から一辺 4～5m 程度の方形周溝墓 SX0813～SX0815 が想定されます。第 6 次調査で確認された小形で四隅の切れた方形周溝墓と比較すると残りがよくないですが、一連のものと思われま。SX0816 はこれらの小型方形周溝墓を呑みこむかたちで築かれていますので、小形の周溝墓は SX0816 に先行することは確実であり、第 6 次で検出された小形周溝墓群の築造も前期までに遡る可能性がでてきました。

南区では方形周溝墓 SX0830・SX0831 が確認されました。SX0830 は東西約 7.5m×南北 3.5mのやや不整な長方形をなし、方位は N6～10° E とやや東に振れています。周溝から出土した弥生土器壺から弥生時代中期前葉の築造の可能性があります。

SX0831 は、東西 7m以上×南北約 8mの方形をなすと見られ、方位は N6～10° E と東に振れます。周溝の切り合い関係から SX0830 より後に築造されたと見られます。

SX0830 の周囲から木棺墓 SX0827・SX0828 が検出されました。棺は組み合わせ式木棺で小口の板を立てるための溝が底部両端にみられます。SX0830 の主体部または、先行して築かれていた可能性が考え

られ、副葬品を伴わないこれら土壙墓群も弥生時代中期前葉以前に遡るとみられます。

このように、第 6～8 次調査で確認された方形周溝墓・土壙墓からなる墓域はほぼ前期末～中期前葉に形成されたものとみられます。環濠もほぼ同時期のものであり、弥生時代中期の集落のあり方を知ることの出来る重要な遺跡といえるでしょう。しかし、集落の中心となる環濠内部については、ほとんど調査が行われておらず今後も継続的な調査が期待されます。

第 2 の成果としては、掘立柱建物群の検出があげられます。

北区の SB0818 は南北棟の建物で、東西 2 間×南北 3 間の規模と見られます。方位は正方位です。柱穴掘方は一辺 0.6～0.8m のほぼ正方形です。柱間は東西 2.1m (7 尺)×南北約 2.4m (8 尺) と見られます。

SB0803 は建物の東妻 2 間分が確認されました。柱穴の掘方は一辺 0.6m です。東西棟の掘立柱建物とみられ、柱間は 1.8m (6 尺) です。方位は N8° W と西に振れます。

SB0804 は 3 間×2 間の南北棟の建物です。柱穴の掘方は一辺 0.7m 前後の正方形のものと、0.6m×1.0m の長方形のもの 2 グループがあります。柱間は南北が 2.1m (7 尺)、東西が 2.25m (7.5 尺) です。床面積は 28.4 m² です。方位は N4° W と若干西に振れています。

今回検出された SB0818 の向きがほぼ正方位で、柱穴も一辺 0.6m (2 尺) を越えるしっかりした方形の掘方を持っています。これらの建物の柱穴の掘方からは黒色土器等が出土したことから平安時代の建物であることが確認されました。

平安時代は大溝 SD0802 (SD0627・0720)

の開削と埋め戻しが行われるなど、調査区
一帯での開発が盛んになる時期といえます。
今回検出された建物は掘方も方形で一辺
0.5m以上と大きく、正方位に近い向きを取
り一連の建物群の中でも中核となる建物と
見られます。

その他の遺構として南区では飛鳥時代の

溝 SD0801 (SR0633・SD0770) が東西に
走ります。延長9mを検出し、最大幅2.3m、
深さ0.5mを測ります。埋土に砂礫層が発達
していることから、常に水流があったと見
られます。出土遺物は多くありませんが、埋
土上面から出土した須恵器高坏から、7世
紀代に埋没したことが分かります。



南区上層遺構 (北から)



南区下層遺構 (北西から)



木棺墓 (西から)



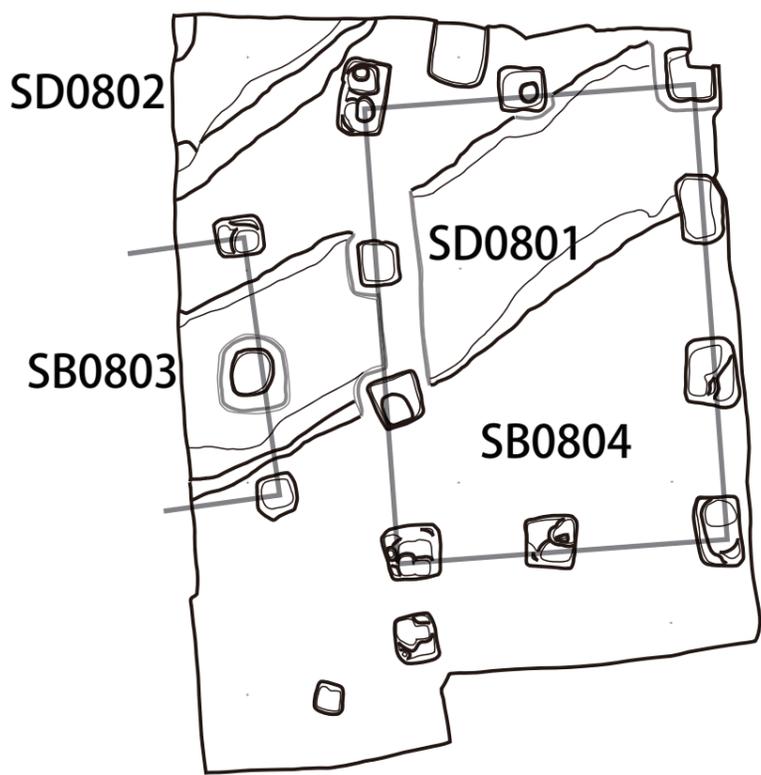
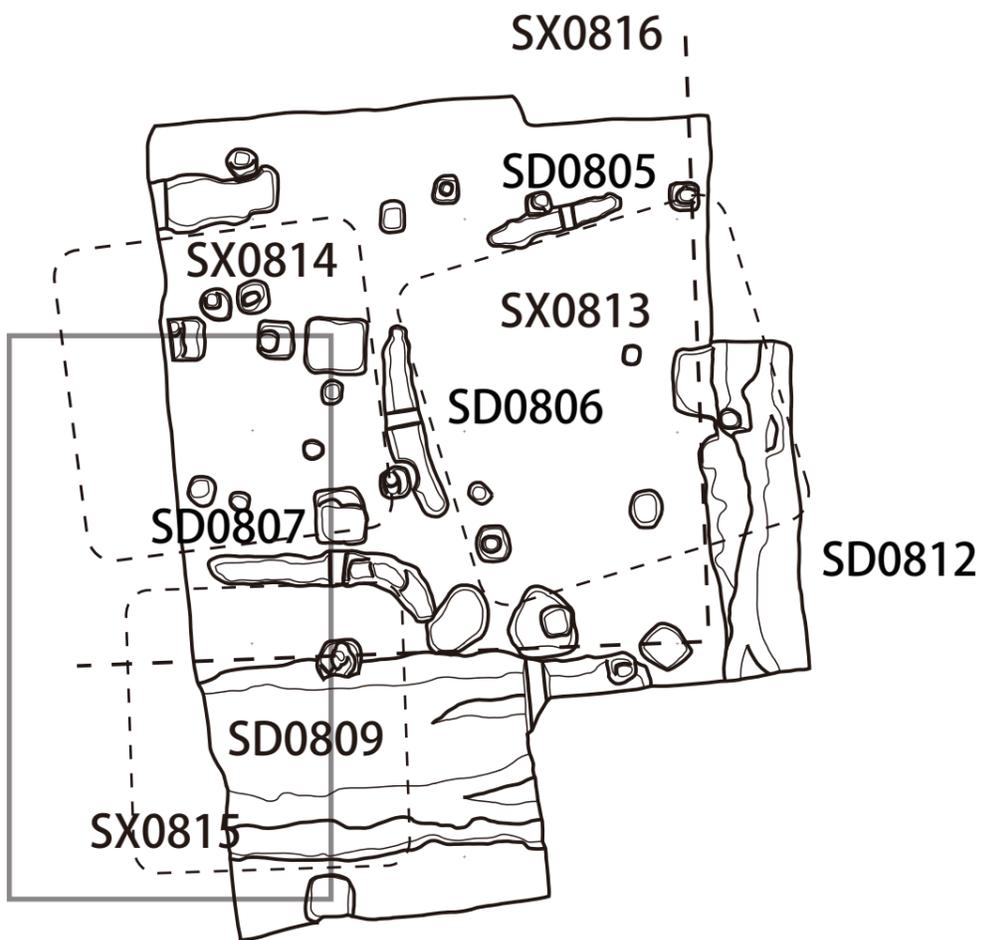
北区 (東から)



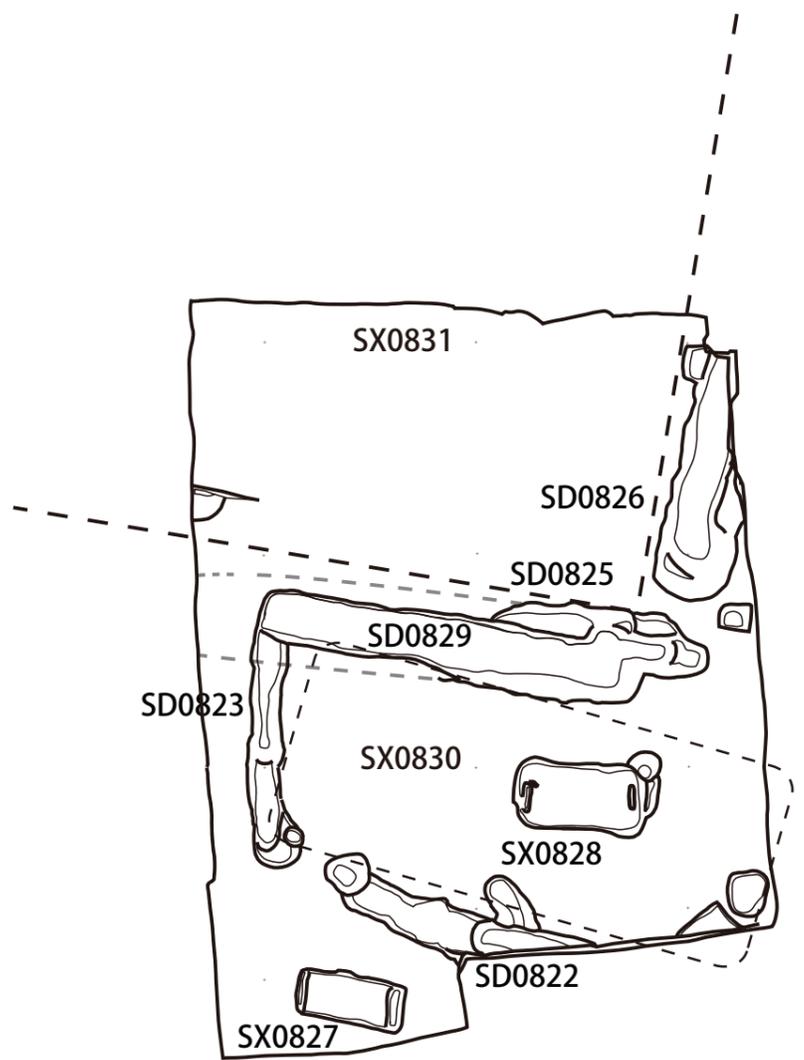
方形周溝墓南辺周溝 (北西から)



弥生土器出土状況



南区



南区(下層遺構)